

日本共産党・江原議員は反対を表明

8日、市議会一般質問で牟田勝浩議員が、サガテレビのウェブサイトに掲載された「悲運の西九州新幹線、開業日は『葬式の日』（はぐくれ時評）」というコラムの記事に飛びついて葬式の日とは何事か、はなはだ疑問だ。として市長に答弁を求めました。市長も、「抗議をしていきたい」と応じました。

山口昌弘議員が議会に「抗議文」を提案

これに呼応するように12日、市議会本会議に山口昌弘議員が、「はぐくれ時評に関する申し入れを行う件」として緊急動議を提案しました。

緊急動議に対して、反対の討論に登壇した江原一雄議員は、問題点を指摘。第1に、牟田議員の質問は8日でした。「コラム」は6日の14時43分に発信されている、一般質問のレクチャーは済んでいる。ところが、私の場合に対しては、三間坂駅のトイレの件を聞くのに、「もうレクチャーが済んでいるから」と執行部から強硬に止められた。このような武雄市議会の議事の進行は異常な姿ではないか。

第2に、市議会として十分な審議を尽くして進めるべきで、賛成多数で強行されるようなことになれば、武雄市議会としての決定になるのです。民主主義社会の中で、当然いろいろな主張があつてしかるべきと私は認識しています。そして、様々な形で伝える手段はたくさんあります。権力として提案するこの山口昌弘議員の提案については問題があると申し上げる次第です。今、私の討論のなかでも、もうこの議決に退場されている議員もいらつしやいます。まさに拙速だと申し上げ反対の討論を訴えたのです。

武雄市議会と市長に批判の声・・・

江原議員の再三の取り下げ要求に、山口議員聞く耳なく「抗議文」強行提案に様々な批判の声が寄せられています。

長崎線沿線の住民の方からは、度を越した武雄

市議会の「サガテレビ・はぐくれ時評」叩き、ウェブサイトを讀んで見たが何の問題もない。私は、金子みすゞの詩「大漁」を想起した。「朝焼小焼だ、大漁だ大羽鰯の大漁だ。浜は祭りのようだけど、海のなかでは何萬の鰯のとむらいするだろう。」物事の「光と影」を歌った傑作だ。武雄市にとっては「お祝いの日」かもしれないが、私が利用するJR肥前鹿島駅利用圏住民にとっては「屈辱の日」であり、みすゞ的に言えば「とむらいの日」だ。這い上がるにはこれまでの数倍のエネルギーが要る。「捨て子」「養子」についても、原文は「いわば、捨て子や養子騒動に見舞われたわけだ」と書かれており、文脈から「出自を差別する」表現と言うには無理がある。

私が見る限り、市長、市議会のクレームは、想像力の欠如という次元の話ではなく、難癖に近い。採決時、退席者と反対があつたことにホットする。こんなことに目くじらを立てたのでは、文学や映画など芸術は生まれ得ない。武雄温泉楼門を設計した辰野金吾が天の上で「世の中、もつと遊び心が必要ですよ」とニコニコ微笑んでいる。と。

また、言論の自由を考えると、あるコラム欄からは、『これに新幹線の発着点となる武雄市が反応した。8日の武雄市議会で、市議が「こがんこと言われてよかとか」と憤慨。小松政市長は「開業を県全体でお祝いしよう、効果を全県に広げていこうとやってきた。そういうところに水を差す記事、発言だ。抗議していききたい」と答弁した。しかし、「抗議とは」穏やかではない。もちろん報道や番組を批判し、不快感を表明するのは自由だ。一般市民や民間企業であれば、撤回を求める場合もあるだろう。一方で主体が自治体だと全く別の意味を持つ。表現や論調が気に入らないとメディアに抗議すれば、それは公権力による言論の自由への圧力になる。「うそを書かれた」などと事実関係を巡って抗議するのは本質的に違う。』と。

この件の火付け役、牟田議員、山口議員、小松市長の見識が問われています。

(裏面にはがくれ時評、抗議文掲載)

新幹線開業日を「葬式の日」としたコラムに飛びついた「抗議文」

はがくれ時評に関する申し入れを行う件（案）

9月6日に サガテレビ 「解説主幹のはがくれ時評」において、
「新幹線開業日は、消えゆく在来線沿線住民にとっては「葬式の日」との
記述がありましたが、コロナ禍、水害を乗り越え、数十年かけて西九州
新幹線開業の日を待ち続けた我々にとっては、これからの地域を盛り上げる
ためのお祝いの日であります。

さらに、「捨て子」「養子」といった比喻については、出自を差別する表現
と受け取られかねないものです。

今回の「葬式の日」「捨て子」「養子」という表現の在り方については、
断じて許せるものではなく、強く申し入れをいたします。

令和4年9月 日

武 雄 市 議 会

株式会社 サガテレビ

代表取締役会長 泉 俊彦 殿

代表取締役社長 吉村 俊造 殿

悲 運 の 西 九 州 新 幹 線 開 業 日 は 「 葬 式 の 日 」 【 は が く れ 時 評 】
2022/09/06 (火) 14:43

今から58年前の1964年、日本初の「夢の超特急」新幹線の登場は衝撃だった。東京オリンピックを祝福する
ような華麗な走りっぷりは、国民の心を揺さぶった。それまで特急で6時間50分かかっていた東京ー大阪間
を、半分以下の3時間10分で走り抜けた。正面のまん丸い「団子っ鼻」が愛称で、少々ブサイクだったが、ま
だ真っ黒い煙を吐く蒸気機関車（SL）が普通に走っていた九州の片田舎から見れば、キラキラした都会の代名
詞だった。

1970年代になると、レールは岡山へ、博多へと伸びた。比較的のんびりした中都市・博多は今や大都市に分類
されるが、その変貌のきっかけは新幹線だった。明太子がバカ売れし、支店経済が花開く。九州各地からヒトや
モノをどんどん吸い上げていく。「新幹線は地域浮揚のマジックハンド」。九州での新幹線の「成功体験」のルー
ツである。あれから半世紀。日本最西端の観光地・長崎につながる「西九州新幹線」が今月23日、開業するが
…。この西九州ルートは、生まれながらに悲運をまとった新幹線である。ほぼ半世紀前の1973年生まれで、高
度成長期の「整備新幹線5兄弟」の一員として華々しく誕生した。ところが生後すぐのオイルショックで「着
工凍結」や、政治判断でのルート変更の憂き目に遭う。さらに、在来線も走れる新車両開発もとん挫して、つい
には地元・佐賀県から「もう新幹線は要りません」と見放されてしまう。

地域に分断と悲劇を生みだした張本人でもあった。今から15年前、新路線誕生の陰で、既存の在来線が切り捨て
てられた。佐賀県の中央部にある肥前山口駅と諫早駅（長崎県）を走る有明海沿いのルートで、沿線住民は今
も、当時流した大粒の涙を忘れていない。「地元合意なくして、新路線の決定はあり得ない」としていた県や政
治家がいつしか変節し、最終的に地域を見捨てて、「地域浮揚」という裏書のない手形にすがってしまった。
鉄道が最も大切にすべき、車窓の景観も同様に切り捨てられてしまった。この区間には長崎本線の圧巻である
有明海を一望できる絶景があり、延々30キロにも及ぶ。有明海は高低差6メートルもの世界的にも珍しい干潟
である。九州内でこの干潟を望める区間は鹿児島本線で熊本県内を走る荒尾ー長洲間と、三角線のそれぞれ約7
キロ区間しかない。新幹線開業後、長崎本線の同区間の特急は激減、ディーゼル車両の鈍行列車が一部残るだけ
になる。

物事にはすべて「光と影」「明と暗」がある。新幹線は経済大躍進のニッポンを支える花形だった。ヒトが大量
に動き、交流し、町を活性化させるツールとしては、これほど便利なものはない。しかし、時代は変わる。右肩
上がりだった社会は曲がり角を迎え、21世紀は低成長、人口減、超高齢の時代になった。わずか30分ばかり
を短縮するがために、鉄道本来のよさが損なわれ、失われるものがあまりに多い。「影」と「暗」がズシリと重
い。

新幹線開業日は、消えゆく在来線沿線住民にとっては「葬式の日」と言う人もいる。悲運である。

サガテレビ解説主幹

宮原拓也